

〈書 評〉

Shozo Masuda, ed. *Etnografia
e historia del mundo andino.
continuidad y cambio.* (UNIVERSIDAD
DE TOKIO, 1986. 334p.)

本書は、1984年に実施された南ペルーおよびチリの民族学と歴史学を主にした地域調査の成果報告である。中央アンデス南部における環境と人間の相関を多角的にとらえようとする研究は、編者の増田昭三を中心にして、すでに3度の現地調査を重ね、1986年第4回目の調査が実行されている。本書の序文にもある通り、本研究プロジェクトに関連して、日本とアメリカ合衆国で2度にわたる国際シンポジウムも開催されている。過去から現在までの人間の営みの多様なことはいまさら言うまでもないが、これらの調査やシンポジウムが明らかにしてきたことでもわかるように、その探求はいかにも奥が深いものである。思いがけぬ事実も、調査によってつぎつぎと現われ、アンデス地域の人間活動の幅の広さはあらためてわれわれを驚嘆せしめるのである。

本書は、1984年度の調査に参加した日本、ペルー、チリの研究者の手になる論文を集めて、つぎのような構成になっている。

第1部 歴史的研究

1. F. Pease：インカ帝国における所有の意味
2. M. Mould de Pease：観察者についての観察——E. G. Squier について
3. 高橋 均：16世紀南アンデスの住民の移動と労働

第2部 民族学的研究

1. 稲村哲也：ペルー南部高地の農民と牧民の間の構造的関係
2. 恒川恵市：カマナ谷の政治・経済における山地と海岸の相互関係
3. 増田昭三：アンデス民族誌における海草——過去と現在
4. B. Bittmann：チリ北海岸の生物資源の利用

F. Pease は、クロニカその他の文書記録の記述をもとに、インカ帝国時代の所有の観念の内容を具体的につかみ出す試みを行なっている。植民地時代の土地の帰属にかかわる文書には、しばしばクラカのものとしてスペイン人がみなした土地が、究極的には共同体のものであるという訴えが見出される。そして、さらに実態をよく見ると、クラカのものとしてされた土地には共同体の成員が労働を投下し、その産物は一部がクラカの消費にあてられたとはいえ、多くが共同体の成員に再分配されていたようにみえる。クラカは所有者ではなく管理者ということになる。そしてインカ王と支配下の民族集団との間にも同様なことがいえる。要するにインカ時代の土地の所有とは、その土地を利用できる権利のことである。このことは各農民に割当てられる土地の広さの概念にも関係する。土地は必ずしも絶対的な長さや広さの単位ではなく、耕作に要する労働量で測られるという。

また、土地の耕作や収穫物の処分においては互酬と再分配の原則が基本となる。従って、財産とか所有権は、この原則と結びついた慣行であって、16世紀のスペイン人の考え方とは全く異なるものである。そこでこのような視点から、アンデスの人間と物との伝統的關係は、今後さらに再検討をしてゆく必要があると結論する。

Pease の論は、特に目新しいことではない。彼の論はペルー全土にひろく文書による例証を求めるので、一般論の性格を帯びる。今後、特定の地域を対象をしぼって、この実態追求が必要となろう。また、クラカと共同体の成員との間の再分配関係についても、もっと詳しい事実を見つけだす必要がある。互酬性とか再分配という用語が与える印象と、実態とは本来異なるものであり、われわれにとって関心のあるのは実態である。

M. Mould de Pease は、19世紀なかば頃外交官としてペルーに来て、民族学的にも考古学的にも若干の貴重な記載を残したアメリカ人の E. G. Squier についての考察をまとめている。そして1868年と1877年の著作の間の異同の指摘や、原稿自体の見直しを通して、Squier のペルー観や、彼の記述の背景を探っている。ティアワナコの村のフィエスタの記述は民族誌のデータとして重要だが、1868年ではそれが聖週間、77年ではコルプス・クリスティに行われたとなっていることなど、注目すべき異同が指摘されている。彼の著書は1877年のものが一般には知られているが、68年の雑誌連載記事や原稿にあとからいろいろな配慮のもとに修正が加えられていることがわかる。いくつかの絵も付せられていて興味深い。

高橋均は1575-91年の間のアレキパ市の公証原簿の第一次資料の分析を手がけ、当時のインディオ労働者の移動や社会組織について新しいデータを提供している。

まずアレキパ近郊のスペイン人の土地で働くインディオの出身地であるが、労働契約書などにのっている405人のうちアレキパ生れは男女あわせて38%、その他はエクアドルからアルゼンチンにまたがってさまざまであるが、なかでは南ペルーとクスコが多い。但し女性の約半分はアレキパ生れである。スペイン人の植民地となって30年余を経たにもかかわらず、アレキパ生れのインディオ労働者が少ないのはどう解釈したらよいのか。子孫を残す前に死んでしまうほど死亡率が高かったという形跡はなく、むしろある期間働いたのちに出身地にもどって行った、そして新たに若い別の労働者が出てきていたのであろうと高橋は考える。アレキパ市に隣接して形成されたチンバという町では、出生届は多いが死亡届は少ない。若い男女が働きに出てきて、子供を作ったのちしばらくして故郷の村に帰り余生を送ったのであろう。

また、チンバでは、出身地を同じくする者がアイユという単位を形成し、それぞれにカシーケを立てており、インカ時代からの慣行が持続している。と同時に、チンバは出身地を異にする人々が集まってひとつのレパルティミ

メントを構成していて、一面解放的な性格もあるが、それだけに、レパルティミエント、ムニシピオ、アイユという三重のシステムをもつ複雑な組織になっていた。こうして高橋は、第一次史料の分析を通じて、16世紀後半のアレキープにおける高地と低地の関係史の一端を、伝統の持続と新たに課せられた植民地制度のからみあいという形で明らかにして、アンデスのエスノヒトリーに新しい知見をもたらした。

稲村哲也は1978年以来、アレキープ県のプイカ地区の牧民の民族学的調査を手がけ、すでにいくつかの報告を発表している。それらは、アンデス高地の牧民文化に関しての最も信頼できる、綿密な実態調査の記録としてたいへん貴重なものである。本書の論文では、そのような報告をもとに、プイカ地区の牧民の全体像がまずわかりやすく説明される。牧民の住む海拔4000メートル以上の高原は寒冷の故に農業はできないが、リヤマとアルパカの飼育には適している。リヤマは輸送手段としても重宝で、農作物の収穫時には牧民が谷に下りて農民を手伝い、その報酬として一定割合で作物を受けとる。ここにまず牧民と農民間の経済的互酬関係が成立する。また、宗教慣行の面での互酬性も面白い。プイカの3大フィエスタにおいて、農民牧民両者の参加、農民だけ、牧民だけと、特に主催者と主たる参加者のちがいがあり、登場する動物も、農民には牛、牧民にはリヤマというちがいがあがる。3種のフィエスタはすべてプイカという町で行われる。こうして、農牧両者は、経済的・宗教的にはひとつの全体構造の中に位置づけられ、両者の間に相互依存と役割分担の関係がみとれる。

一方、社会的にはどうか。一般にペルーの場合、農民と牧民の間には通婚関係がほとんどないといわれる。ところがプイカではコンパドラスゴの関係が農牧間に成立し、通婚の事例もあって、社会的にも両者はひとつの構造に属すると稲村は考える。しかしながら、農牧間の婚姻事例は、牧民に最も近い、高いところに居を構える農民と牧民の間にみられるもので、ペルーにおける一般論への反証としては極めて弱い。だが、経済的關係はコンパドラスゴのような社会関係と結びついており、フィエスタでの役割分担にもみられ

るように、農民と牧民が全体としてプーナの高原からケチュアの谷間までの環境を利用しつつ自給自足を達成する生活の構造を形作っているといえる。稲村の行なったような長期にわたる詳細な牧民調査はアンデスではほとんど他に例がなく、比較に耐えるデータは今後の調査に待つしかない。

恒川恵市は、南海岸の小都市カマナを拠点にして、下から高地と低地の関係を眺めようとする。カマナ谷は下流の平野に1914年棉の農園ができ、1960年代に入ると水稲耕作がさかんになった。棉にしても水稲にしてもある期間大量の人手が必要で、労働力の大半は高地のインディオの出稼ぎに求めている。米と豆の耕作と収穫のため、3-5月、8-12月に多くの人手が要る。コントラティスタは山で人を集め海岸に送りこむ。一時的に山と海岸の住民の共住が生ずるが、両者の間には微妙な不信感が横たわる。

さらにカマナ谷を少しさかのぼると、名物のカマロンを獲る人びとがいる。面白いことにカマロン獲りはすべて高地の住民である。そして海岸地方の住民が集荷と外への販売を担当し、ここにも山と海岸の住民間の密接な、しかしながらひとつとけあわぬ関係がみられる。水田労働やカマロン獲りの調査は、それぞれの労働慣行を明らかにして、たいへん興味深くかつ貴重なデータといえる。

増田昭三は、1978年以来、アンデス地帯での海草利用を手がかりにして、山と海岸の関係史に新しい視点を提供してきているが、今回の報告では、北ペルーからチリにまたがって、海草利用の実に広い分布を明らかにしている。ヨーロッパと日本における海草の利用法と歴史を概観した上で、アンデス地帯の海草利用について、過去の文献から現代までのいろいろな事例が紹介される。16世紀のクロニカにすでに海草利用は記されていたのに、誰もあまり注意を払わなかった。海草になじみの深い日本人であればこそ、現地調査の折にこれに着目できたのであろう。そして追求してゆくと、海草の利用は意外に広範囲でみとめられ、しかも海草をとるのは高地の住民特に牧民や高いところの農民であることがわかってきた。海草とりの最近の衰退の一因は、冬期の霧の水分をもとに砂漠の一部が草地と化すローマスの衰微にあるとわ

かるや、海—ローマ—谷間—プーナと、アンデス西斜面の全体が高地住民の生活の舞台となって、高地と低地の間の文化的・社会的関係に新しい展望がもたらされる。しかもそれは現代のみならず先史時代のプロセスの再考をも迫るのである。異なる視点がいかに新しい知見をもたらすか、また調査者の文化的背景がいかに異なる視点を可能にするかということの好例である。

Bittmann は、チリ北部の海岸地方の主として生物資源の利用について、特に植民地時代の記録を丹念に調べている。これまた実に多彩な利用法が紹介されて、未知の領域の広さを示してくれる論稿である。アザラシ、クジラ、ラッコ、魚、貝、タコ、イカ、ウニ、海亀、海鳥、グアノ、海草、陸棲の動物、植物のそれぞれについての人間の利用した記録が要約される。従来、海産物の利用というと、先史時代の、土器や農業の普及以前の時代にさかんであったとされて、その後の時代についてはなおざりにされていたのであるが、チリ北部のこのような研究は、ペルーの海岸地方に関する Rostworowski (1981) の研究とともに、考古学にも寄与するところが少なくないが、やはりアンデス地帯の人間史の重要な一面を明らかにしてゆくであろう。

本書の論文はいずれも新しい知見と視点をアンデス研究の上にもたらしているといえる。実地調査、特にいろいろと異なる文化的背景をもつ研究者による調査が、いかに実りの多い成果をあげるものであるかを、よく示している。本書によって、山と低地の関係を特に南ペルーからチリ北部においてわれわれはかなり知ることができた。だが、欲を言えばその関係は下から見えることを中心にしている。牧民の調査はあったが、グアイカの牧民は海岸までは下りてゆかない。いったい、カマロン獲りや海草採りの人びとの故郷では、どのようにしてそのような人びとを送りこむのか。その人びとは故郷に帰って何をするのか。なぜ海岸の住民がそれに従事しないのか。このような問題がもっと明らかにされてゆくとき、われわれは山と海岸の関係について、より全般的にしてかつ深い理解を得ることになろう。今後の調査の進展に期待したい。

大貫良夫（東京大学）